

【特別寄稿】

被服衛生学部会の発展を祈念して

～ 被服衛生学とともに ～

稲垣和子

神戸大学名誉教授、倉敷市立短期大学名誉教授

被服衛生学部会 30 周年、誠におめでとうございます。早いもので今年には部会報創刊から 32 年目を迎え、光陰矢の如しです。部会報の 15、20、25 各号に私は祝辞を述べさせて頂きました。今回遅くなりましたが、願いを叶えていただきましたこと、皆さまにお詫びし、心から感謝御礼申し上げ光栄に存じます。

現在、部会は年ごとに発展し、内容も充実され、会員の強い絆は被服衛生学部会の誇りであると思います。

さて、新制大学が誕生して家政学が大学における大切な教科と認められ発足したのは昭和 24 年 4 月、従来の家事裁縫の域から脱し、学問としての家政学の創設は、家政学担当者にとりまして重大な課題になったのです。私は昭和 23 年に奈良女高師を卒業し岡山青年師範学校に勤務しました。僅か 1 年間の経験で家政学とは何ぞや、その本質・内容に拘わる研究や各分野における研究を深める必要に迫られました。今後どうすれば良いか、新制と旧制の谷間にあって只管考えた末、再び勉強が必要と決意し、母校の近くで勤めながら研究の出来ることを祈りました。幸い、半年後に奈良師範学校（現在の奈良教育大学）に籍があり、採用して頂き教育研究の道に入ることができました。そして、衛生学の大御所であられる緒方洪平先生との出会いがあり、2 年間の特別講義を聴講、毎月 1 回京都での衣服研究会にもお誘いいただきました。服飾美学面の研究発表もあり、上村六郎先生（当時大阪教育大学）の色彩に関する御講演も非常に役に立ちました。

ふとした事から更紗に魅力を感じたのもこの頃です。余技として絵更紗の小作品の制作、和更紗をはじめ大名家の更紗の調査研究も苦勞ですが楽しいものでした。被服衛生学と全く別世界に思われるでしょうが、私にとりましては、両者共に

融合一体となって、魂が浄化され、教育研究面の力になり、泉のように勇気が出て、不思議ですが有り難く夢中で努力致しました。

昭和 35 年神戸大学に移籍、昭和 36 年から医学部研修員として衛生学教室に所属し、戸田嘉秋博士の御指導を受けつつ被服衛生学の本格的な研究に入りました。主として戸田博士創製のサーマルマネキン^{註1,2)}を用い、各種被服の保温力につき実験を重ねました。衛生学教室の一室を実験専用にお借りし、人工気候室はすべて手作り、種々の環境温熱条件にも工夫を凝らし努力しました。手廻しの計算機も懐かしく 40 年前の事です。人体実験も必要と法医学教室のモルグ^{註3)}一室を借りての測定、これは意を決しての実験でした。但し実験に成功の折りの快適感、達成感は格別、次の実験に精出しました。その後、新設の人工気候室（-20℃、-40℃）での人体実験も行い、当時を思い出すと感無量、胸に蘇ってまいります。学位論文は「衣服の保温力基準値の推定に関する実験的研究（第 1 報～第 3 報）^{註4,5)}」で、従来得られなかった正確なデータを得て、実際に得られる衣服保温力の推定を初めて可能にしたと評価されたことは感謝に耐えません。

定年退職後、与えられた私学と公立の大学専任教授としての経験は、教育研究面その他に亘り国立大学と全く異なった感じでしたが、非常に尊い勉強をさせて頂き有り難かったです。最後の大学では理想とする現代の被服学に挑戦、新設学科^{註6)}でもあり全力を注ぎ教育研究の日々を過ごしました。

ジャワ更紗の調査は昭和 48 年から不定期的に行い、たびたび現地に赴き、国際交流も楽しいものでした。スサナ・ラハルジョ女史^{註7)}には種々の着衣調査に協力を頂き、熱帯圏での被服につき現在考察検討中です。

日本人は一般に英語に対しハンディがありますが、慣れと経験を積むことで次第に解決されると思います。人間の健康面に中心視座をおく被服衛生学の研究は、医学との連携を密接に保つことも肝要、被服と健康に関し研究者同志が国際的に討論できるチーム作りが重要と存じます。論文は英文で投稿する努力が一番でしょう。



写真1 スサナ・ラハルジョ女史とともに

災害の多い日本、高齢化の進む現在、被服衛生学は家政学の中で最も重要な研究分野となっています。昨秋、iPS細胞の開発でノーベル医学生理学賞受賞の山中伸弥教授、発表は世界を驚かせ私どもに夢と希望を与えて下さいました。嬉しいことです。

想いかえせば、被服衛生学研究委員会が発足して本年は37年目になりました。部会とともに生きてまいりました私は有り難く、よき師を与えられ、先輩・後輩にも恵まれた年月を心より感謝致します。

皆様の益々のご活躍をご期待し、大きく前進されますよう被服衛生学部会のご発展を祈念致します。



写真2 稲垣主宰による絵更紗展にて卒業生とともに（後方の絵は稲垣作 2012年3月）

註1) 戸田嘉秋：衣服研究用銅製人体模型の創作

とその応用 第1報 日本衛生学会誌 13;146, 1958

註2) 戸田嘉秋：衣服研究用銅製人体模型の創作

とその応用 第2報 日本衛生学会誌 14;77, 1959

註3) 人体保管室 (-5℃)

註4) 稲垣和子：衣服の保温力基準値の推定に関する実験的研究

第1報～第3報 神戸大学医学部紀要 40;157, 1979、40;169, 1979、40;177, 1979

註5) 稲垣和子：サーマルマネキンによるclo値

の測定 日本家政学会被服衛生学部会会報 第5

号, 1985

註6) 稲垣和子：倉敷市立短期大学服飾美術学科

人間環境学 人間工学研究室紹介 日本家政学会

被服衛生学部会会報 第18号, 1998

註7) 在インドネシア共和国大阪総領事館勤務,

ジョクジャカルタ出身

<連絡先>

〒703-8266 岡山市中区湊359

稲垣和子